

辣腕上司の甘やかな恋罣

Aiko & Minato

綾瀬麻結

Mayu Ayase

eternity



エタニティ文庫

目次

辣腕上司の甘やかな恋罾

5

書き下ろし番外編

愛こそすべて

335

辣腕上司の甘やかな恋罨

第一章

雲一つない澄み渡る青空と、燦々と照りつける太陽。

オフィスビル内はエアコンが効いて涼しいとはいえ、窓の外に広がる青空を眺めるだけで、出勤時の強い陽射しや蒸し暑さが甦ってくる。

今年は残暑が厳しいと予報されているので、これからも熱中症対策を講じなければならぬだろう。

三十二歳の茅野藍子は、窓に向けていた視線を、秘書室主任の高市宗武に戻した。

お盆休み明けというもあり、今朝は連絡事項が多い。藍子は必要だと思われる内容を手帳に書き留めた。

藍子は、コンピュータシステム開発に重点を置くIT企業に勤めている。

会社自体はそれほど大きくない。しかしプログラマーを海外企業に出向させたり、大学の教育プロジェクトに協力したりして、人材育成に力を入れている。その結果があつてか、業界内では一定の評価を得ていた。

「秘書室からの連絡は以上になります」

藍子より三歳年上の高市の言葉で、秘書室の朝会が終わった。

ここで主任は自分の仕事に戻る。そしていつものように一般秘書業務を行う一課と、主に部長クラス以上の専属秘書を務める二課の秘書たちが一ヶ所に集まり、互いのスケジュールを確認し合う。

しかし、今日は休み明け。

次第に脱線し、お盆休みに彼氏とどこに旅行したとか、海外旅行で素敵な出会いがあつたとか、女子トークが始まった。

華やかな彼女たちは皆、恋愛に積極的だ。若い女性らしくはつらつとし、その姿は眩しいほど輝いている。そんな秘書たちの中で、藍子の存在は異色だった。

藍子の会社では、秘書はまず、一課で一般的な技能を身に付けるところからスタートする。そして四、五年経験を積んだのち、二課への異動願を出し、叶えば、部長以上の役職者の専属秘書となる。それ以後は、取引先の素敵な男性と出会って寿退社するのが定石だった。

だが秘書室に配属されて十年にもなるのに、藍子は未だ一課に留まっただけで、そのルートからは完全にはずれている。何故なら、寿退社を目指していないからだ。

秘書室に所属する藍子以外の女性秘書は皆、二十代。才色兼備な彼女たちがそのルー

トを歩みたいなら、いくらでも応援しよう。

そもそも藍子は、結婚して家庭を築きたいという憧れもなければ、昇進して社会的地位を固めたいという望みもなかった。それよりも一課に居続けて、縁の下の力持ち的な存在に徹したかった。

どうしてそこまで異動を避け、先輩たちのあとに続きたくないのか。

その理由は一つ。

男性など、傍に近づきたくもなければ、個人的なかかわりを持ちたくもないからだ。

約十年前、藍子には恋人がいた。ところがその男性に、藍子は酷い言葉で罵られ、女性として不出来との烙印を押されたのだ。

彼曰く、藍子は色気がなく、男性の欲望をまったくくすぐらないらしい。そんな女には誰も見向きもしない、本気になる男などいないとまで言われた。

そんな彼の隣には、裸身の美女がベッドに横たわり、彼の胸板に手を這わせながら藍子を鼻先で笑った。

元カレの言葉に藍子の心はスタスタに引き裂かれて、同時にトラウマを植えつけられた。

女性としての魅力のない藍子が、男性に好かれるはずがない……と。

そうして藍子は、男性と距離を置き、自分からは絶対に近づかなくなつた。

過去の辛い経験でいろいろとこじらせてしまったせいで、恋がどういふものだったのかもはや記憶にない。でも後輩たちが彼氏の話ではしゃぐ姿を見ているのは、とても楽しく、微笑ましく思っていた。

輪の外で後輩たちを見守っていると、高市が藍子の方へ近寄ってきた。

「茅野さん、ちょっといいか？」

「はい」

高市はおしゃべりに興じる課員たちにも「さあ、君たちも仕事に戻りなさい」と声をかけた。

「はい」

席に着く後輩たちの姿を目で追いながら、藍子は眼鏡のブリッジを指で押し上げる。度の入っていない伊達眼鏡——それは、藍子が男性と距離を取るために身に着けたもの。心をガードするには心許ないが、それをかけることで安心感を得られる方が大事だった。

また見た目的にも地味になる。これで仕事一辺倒の態度を取っていれば、誰も藍子には関心を持たないだろう。

もう二度と男性には傷つけられたくない。その一心で、使用している。今ではもう、藍子自身を守る鎧のようなものとなっていた。

藍子は眼鏡から手を離し、背の高い高市の隣に並んだ。

「どうされたんですか？ 何か、見落としてもありませんか？」

「いや、そうじゃない。ちょっとこっちに来てくれ」

促されて主任のデスクへ向かい、後輩たちに背を向ける形で立ち止まった。

「君に呼び出しがかかっている。総務部長からだ」

内緒話をするように、高市が上体を少し屈める。

「わたしに、ですか？」

「ああ。システム研究部の部長も一緒だ」

突然の知らせに、藍子は目を見開いた。

総務部は、秘書室や総務室を、システム研究部はシステム関連の開発室や支援室をまとめている部署だ。その部長が藍子を呼ぶとは、いったいどういうことだろう。

「会議室に来てほしいらしい」

続いて時間を告げられ、藍子は腕時計に視線を落とした。あと十分ほどしかない。

「茅野さんの仕事は？ 何かあれば、こちらで対応するけど」

「大丈夫です。午前中はスケジュール管理と資料の整理のみで、急ぎの仕事は入っていません」

「そうか。それなら良かった。……じゃ、とりあえず、行っておいで」

藍子は高市に頷くと、一度デスクに戻った。

何故呼び出されるのか見当もつかないが、とりあえずシステム手帳を持ち、ホワイトボードに席を空ける旨を記載して、秘書室を出た。

会議室へ向かう藍子の目に、廊下の先で立ち話をする総務部長とシステム研究部長の姿が入った。

二人は眉間に皺を寄せて、意味深に頷き合っている。

その様子に藍子は不安を感じ、足を止めてしまった。

システム手帳を掴む手に力が入った時、総務の西田部長が藍子に気付いた。

「ああ、茅野さん」

「おはようございます。お待たせしてしまいましたでしょうか。申し訳ありません」

藍子は慌てて彼らのもとに駆け寄る。西田は伊達眼鏡を直す藍子を見て頷き、システム研究部の部長に向き直った。

「彼女が秘書室一課の茅野さんです。茅野さん、こちらはシステム研究部の阿川部長だ」

「茅野です。よろしくお願ひいたします」

藍子が挨拶すると、西田が頷いた。

「では、詳細は中で話しましょう」

藍子は素早くドアを開けた。上司たちを室内に通したあと、コーヒーを頼むため内線電話の受話器を持つ。

「茅野さん、飲み物は結構だ。すぐに話を終わらせなければならぬからな」

西田に言われて、藍子は受話器を戻す。座るように促され、ソファに腰を下ろした。持参したシステム手帳を膝の上に置き、背筋を伸ばす。

「改めまして、彼女が秘書室一課の茅野藍子です。年齢は三十二歳。とても有能で、彼女ならどのような難しい仕事でも冷静沈着に対処できると、秘書室長から推薦されています。秘書室内での評価が非常に高い一課のベテランで、他の秘書たちも一目置く存在ですよ」

「それほど有能ならば、既に役員付きになってもおかしくないのでは？ 二課に異動の話は出ていないのか？」

「茅野さんから異動願は出されておりません。つまり、彼女の意味で一課にいるのかと。どうなんだい？」

話を振られて、藍子は一瞬固まってしまう。

何故藍子がこの場と呼ばれたのか、その理由がわからない。何をどう話せば上司たちの望む答えになるのだろうか。話の行き着く先を予想できず、簡単に口を開けなかった。すると、西田が藍子を和ませるように微笑んだ。

「訊かれたことに答えるだけでいいよ。私たちは、茅野さんを知るために質問しているのだからね」

「はい……」

頷いたものの、身が竦む思いだった。けれど、これ以上部長たちの思惑を気にしても進まない。

藍子は再び姿勢を直し、強張る頬の緊張を無理に解いた。

「秘書室には、有能な後輩たちがあります。二課への道は彼女たちに譲り、わたしはこれまで培った経験を生かし、いつでも彼女たちを助けられる存在でいたいと思つていきます」

「つまり……茅野さんは誰かの専属になるのが嫌だという意味かい？」

「いいえ」

阿川の問いを藍子は即座に否定した。

「指示があれば従います。しかし、わたしには専属秘書になりたいという願望はありません。一課の秘書として、皆のサポートに徹したいと望んでいます」

部長たちが、さっと顔を見合わせる。阿川が頷くと、西田が藍子に視線を戻した。二人の妙な態度が気になって仕方がないが、藍子は口を閉じて次の質問を待つ。

「なるほど。サポートに徹したいか。いい心掛けだ。指示があれば従うという答え

も気に入ったよ。それはそうと、茅野さんの月末までの予定を教えてください。長期で休む予定などあるかね？ 仕事のスケジュールはどうなってる？」

「有休を取る予定はありません。また、今月末までの主な仕事ですが、基本的な資料整理やスケジュール管理の他、二課の補佐となっています」

阿川は頷くと、内ポケットから取り出した用紙に目を走らせた。

「茅野さんは、料理教室に通っているのか？」

「はい。そうですけど……」

藍子が料理教室に通っていることは、秘書室で雑談していた時に話したので、特に秘密ではない。だが、それが今、何の関係があるのだろうか。

「英会話に不自由しない件は事前に秘書室長から聞いて知っていたが、料理までできるとは……うん、これは申し分ないとか言いようがない」

困惑する藍子をよそに、阿川はすっきりした表情で顔を上げた。そして、西田に目配せをする。阿川にあとを任された西田が、藍子に向き直った。

「茅野さん。八月いっぱいまで持ち場を離れてほしい。会社には出勤しなくて結構だ」

「……えっ？」

これはまさか、左遷^{させん}？

藍子の顔から一気に血の気が引いていく。

後輩たちのように、綺麗でもなければ可愛くもないが、地道に仕事に取り組んできたつもりだ。

それなのに、この仕打ちはあんまりだ。

藍子はシステム手帳をきつく握り締めると、身を乗り出した。

「あの！」

「その代わり、とても重要な別の場所へ行って……うん？ 何だい？ 質問かな？」

二人の声が重なり、西田が言葉を止めた。藍子は失礼なことをしてしまったと焦るものの、彼が放った言葉が頭の中でぐるぐる回るのを止められない。

別の場所へって、いったい？

「茅野さん？ どうした？」

阿川が、藍子を心配げに見つめる。藍子は我に返り、頭を下げた。

「お話を遮^{さか}ってしまい申し訳ありませんでした。どうぞ続けてください」

二人の顔を交互に見ると、今度は阿川が口を開いた。

「この先は私から伝えよう。えっと、どこまで話したかな……。そう、今の業務を脇に置いてでも、君に頼みたい重要な仕事がある。茅野さんの秘書としての取り組みを評価した上でのことだ。期間は八月いっぱい。これから概要を説明させてもらおう」

阿川が一枚の紙を藍子に渡した。

そこに書かれていたのは、ある男性の略歴だった。目が飛び出るほどの凄い内容に、藍子は自然と目を見開く。

大学在学中に国内外のセキュリティハッカーコンテストに出場し、表彰台を総ナメにしたグループのリーダー。今はこの会社の社員だが、アメリカの大企業に意向中と明記されていた。

意向先でも実力を発揮し、世界規模で事業展開する大企業のシステム制作に関わったようだ。

藍子は数々の輝かしい業績を見たあと、そつと顔を上げる。

業界内で有名人であるはずのその人物が何故、アメリカの大企業へ就職せず、日本の会社に入社したのか。そして、このようなものを見せて、一体上司たちは藍子に何を頼もうとしているのだろうか。

「彼は黒瀬湊人。二十八歳と若いけど、システム開発室の誰よりもセキュリティプログラマーに通じている天才だ。さらにエンジニア……SEとしても優秀。その彼が帰国し、九月からここに出社する。八月の頭に帰国してるが、現在彼は、うちが協力している技術者育成プロジェクトに関連する仕事を自宅でやっていてね。会社ですればサポートもできるから出社しろと伝えたけど、辞令は九月一日からと言って……。とはいえ、会社の業務を行っていることに変わりはない。そこで、彼のもとへ優秀な秘書を派遣すること

に決めた。私たちが白羽の矢を立てたのは、君だ」

「……わたし？」

二人が力強く頷く。

「黒瀬君は、我が社を代表するプログラマーだ。会社にとって、非常に重要な人材でもある。私たちは、彼が仕事に専念できる場を用意しなくてはならない。彼は秘書など不要と拒んでいるが、何と言われようと、茅野さんに行ってもらい、雑用のすべてを任せたいと思ってる。私の言っている意味、わかるね？」

「はい」

藍子は素直に返事する。

ここへ来て、ようやく部長たちの目的がわかった。藍子の左遷話ではない。黒瀬という天才プログラマーの自宅へ赴き、八月いっぱいまでそこで雑務をしろという命令だ。

「……いつからでしょうか？」

「今日このあと、すぐにだ」

「わかりました」

「ああ、こういう秘書がやっぱり望ましいね」

反論など一切せず受け入れる藍子に、二人は満足げに口角を上げた。

阿川が、封筒を藍子の前に置く。

「黒瀬君の自宅住所や、君への指示、彼に渡してもらいたい書類が入っている。ここに書かれた内容は、社外秘のみならず、秘書室内でも共有不可だ。いいね？」

「はい」

藍子はずしりと重い封筒を膝の上に置く。顔を上げると、西田が真剣な表情で藍子を見つめていた。

「この件については、私から秘書室の小林室長に連絡を入れておく。……さて、他に何か訊きたいことはあるかい？」

「いいえ、ありません」

「よし、それならば早速出発してくれ。頼んだよ」

それを退出の合図に、藍子は立ち上がる。二人に頭を下げて会議室を出るまでは背筋を伸ばしていたが、一人になった途端下肢の力が抜けた。

廊下の壁に凭れて、早鐘を打つ心音を宥める。何度も深呼吸を繰り返していると、徐々に落ち着いてきた。

「左遷じゃなくて良かった！」

思わず口をついて出た本音に、藍子は苦笑する。でもすぐに、ドア一枚隔てた上司たちを意識が向いた。

何故、黒瀬という天才プログラマーのもとに藍子を送ると決めたのだろうか。優秀と

いう意味でなら、藍子より英語が堪能で気が利く後輩がいる。

室長が藍子を推した理由に小首を傾げそうになったその時、急に部長たちの笑い声が聞こえてきた。

反射的に姿勢を正すが、上司たちが出てくる気配はない。

藍子が耳を澄ませていると、彼らは廊下にまで聞こえる声量で話し始めた。

「正直な話、黒瀬君の自宅に秘書を送るのは本当に正しいのか、かなり悩んだよ。だが、茅野さんと会って安堵した。彼女なら任せられる。黒瀬君より年上だから、簡単に言い負かされないだろう。何が起こつても簡単に引き下がらないと見た」

「ええ、本当に。容姿端麗な秘書を送れば、黒瀬君の仕事の邪魔になったかもしれない。その点、茅野さんなら大丈夫でしょう。小林室長も彼女の秘書としての能力に太鼓判を押してましたし」

「茅野さんを見る限り、黒瀬君の足を引っ張るような真似などしないのが伝わってくる。色恋沙汰で彼の才能を潰すわけにはいかないからな」

盗み聞きしていた藍子はうな垂れて、唇を強く引き結んだ。

そうだったんだ……。容姿端麗じゃないからわたしに回ってきたのね——と力ない笑みを零すが、そう思われても仕方ないのは、藍子自身が自覚していた。

ちらつと廊下の窓に視線をやり、そこに映る自分の姿を見つめる。

同僚たちの中には、華やかな装いよおをしてる者も多いが、藍子は清楚な服装を心掛けている。膝丈の上品なスカート、袖ドレープが特徴的の柔らかなシフォンの半袖、そしてミドルヒールを見れば明らかだ。

だからといって、決して女を捨てているつもりはない。セミロングの髪を緩やかに巻いて後ろで一つにまとめ、小さなスタッドピアスを付けるぐらいのお洒落しゃれはしている。

ただ、藍子は男性の目を避けるために、オーバルフレームの伊達眼鏡だてをかけていた。

それがなくても、男性の興味は可愛くて素敵な同僚たちに向くので、藍子に声がかかることはない。わかつてはいるが、それでも眼鏡をかけるのは、藍子自身が男性を拒絶している態度で示すためだった。

男性たちはそれを肌で感じるのか、異性ではなく秘書として藍子に接する。

これこそ、藍子自身が望んだこと。頼りになる秘書だと思ってもらえればいい。

藍子は、それを誇りに生きていくだけだ。

会議室では、まだ部長たちが話している。今も黒瀬の話題が続いていたが、藍子にできるのは与えられた仕事を誠心誠意こなすこと。それだけだ。

藍子はその場を立ち去り、秘書室に戻った。

自分のデスク周りが片付いているのを確認してバッグを持ち、小林のもとへ向かった。それに気付いた彼が、手元の書類から顔を上げる。

「引き受けたのか？」

「はい」

「そうか。では、秘書室内の調整はこちらです」

「ありがとうございます。今受け持っているスケジュール調整だけ、わたしが責任を持します。後ほどご連絡させてください。他の資料整理などはお願いでできますか？」

「わかった。それについては、私から高市主任に伝えておこう」

小林が頷く。そして、少し間を置いて言った。

「今回の業務は……特殊なこともあって、やりにくいだろう。しかし、これはとても大切な仕事だ。何があるかと極力堪こえてほしい。あと、これを覚えておいてくれ。茅野さんが一課に戻ってくる日は九月一日だ」

小林の言っている意味を、即座に理解する。天才プログラマーに何を言われても、逃げ帰ってくるなということだ。

「わかりました」

「よし！ 早く行ってこい。時間はないはずだ」

「失礼いたします」

高市に簡単に挨拶あいさつしてから、藍子は秘書室をあとにした。

オフィスビルの一階ロビーで、藍子はフロアに置かれたソファに座る。そして、阿川

から渡された封筒の中身を取り出した。

黒瀬の連絡先の他、英語と数字が書かれた書類もたくさん入っている。そこには、赤字でいくつもの注釈が書き添えてあった。

藍子への指示書には、その書類と一緒にUSBメモリも渡すようにと明記されている。そして最後に、何があろうとも、秘書に徹しろとあった。

当然そのつもりだ。にもかかわらず、ここままで何度も念を押されると、逆に不安になってくる。

それでも、上司の期待に応えなければ……

藍子は封筒をバッグに入れると、意を決して立ち上がった。そして黒瀬の住所が書かれたメモを握り締め、彼の家へ向かうため一歩踏み出した。

——一時間後。

閑静な住宅街に建つ、高級そうな低層マンションの前に着いた。タワーマンションとは真逆のその建物は、個々の部屋が広いのが外からでもわかる。

「ここに住んでるの!？」

藍子は目を見開いて思わず立ち止まり、建物や周囲を見回す。

コンクリート打ちでありながら、ところどころにレンガ風のタイルが埋め込まれ、

洒落た模様を作る外観。広々とした明るいエントランス。そして、温もりを感じるウッド仕様の庭。それらすべてに目を奪われる。

黒瀬の年齢で、こんな高級そうな場所に住むのは可能なのだろうか。

そんな考えが脳裏に浮かぶが、すぐに先ほど見た黒瀬の略歴を思い出した。

もしかしたら、ここは日本に戻ってくる黒瀬のために会社が用意したものかもしれない。

部長たちの口ぶりから、黒瀬は会社にとっても大切な人材だということがわかった。そんな彼の秘書に、藍子は選ばれたのだ。

失敗は決して許されない。心して仕事を全うしなければ……

再度自分に言い聞かせて、藍子は建物の中に入った。

洗練されたフロアを進み、セキュリティパネルの前に立つ。メモにある番号を打ち、呼び出しボタンを押した。

『……はい』

深いバリトンの声が響くなり、藍子の背筋に冷気が走った。

スピーカーから聞こえただけなのに、その声は耳孔を侵して心にまで浸透した気がする。その不思議な感覚に、軀が震えて言葉に詰まった。

だが最初で躓いてはいけなないと気持ちを立て直し、何度も生唾を呑み込んでカメラ

のレンズに視線を合わせる。

「黒瀬湊人さんですか？ 茅野と申します。システム研究部の阿川部長——」
 『結構！』

スピーカーの音がブチッと切れた。

用件も言っていないのに、まさか阿川の名前を出しただけで門前払いされるとは。

これは、想像を絶する大変な仕事になるかもしれない。

ここから先、どういう行動を起こせばいいのだろうか。

思わず呻き声うめが零れる。

ついと目線を手元に落とした時、抱える封筒が視界に飛び込んだ。ハツとなり、再度呼び出しボタンを押す。

ところが、今度は応答もない。

だけど藍子には、ここで引き下がるわけにいかない事情がある。間を置かずボタンを連続で押した。

『……うるさい！』

「お忙しいところすみません。ですが……」

封筒を顔の前に掲げる。

「大切な書類を預かってきました。おそらくプログラミングに関係するものだと思います

す。あと、USBメモリも一緒に渡すようにと指示を受けてきました」

そこまで一気に伝えるが、返答がない。

これでも無理？

一向に返事をもらえず、時間だけが過ぎていく。藍子が焦じれてきた頃、スピーカーから黒瀬の深いため息が聞こえた。

『コンシエルジュに連絡を入れるから、彼女に渡して——』

「いけません！」

藍子は封筒を下ろし、真顔でカメラを覗き込んだ。

「他人に大事なデータを渡せと言うんですか？」

「君も他人だろ？」

「違います！ わたしは会社の人間です。黒瀬さんに渡さなければならぬ大事な書類を、見知らぬ人に渡すことなどできません」

黒瀬が今、どういう表情を浮かべているのか想像がつかない。でも、藍子の声が届かなければ、この先秘書として彼の傍で仕事などできない。そんな事態おちいに陥るのだけは、どうしても避けたかった。

でも、もし信用してもらえなかったら——そう思うだけで、どんどん最悪な状況が脳裏に浮かんでいく。次第に、封筒を持つ手が冷たくなっていった。

藍子がもう一度説明しようと試みた時、スピーカーから黒瀬の投げやりなため息が響き、そしてガラスドアが開いた。

ようやく信用してくれた？

藍子は自動ドアが閉まる前に、慌ててそこを通り抜けた。

黒瀬の部屋は、最上階の三階。エレベーターを降りると化粧鋼板の重厚な玄関ドアを横目に進み、目当ての部屋の前で立ち止まった。

失敗は許されない。どのような仕事を指示されても秘書として真面目に取り組むのが、今の藍子にできること。

藍子は黒瀬との対面に備えて、何度も深呼吸をした。気持ちを整え、インターフォンのボタンを押す。

数秒後、重たそうなドアが開いた。

藍子は上司の前に出る時と同じ姿勢で、現れた男性を伊達眼鏡のレンズ越しに見上げる。

「はじめ、まし——」

そこで思考が止まった。目を見開き、自分を凝視する黒瀬に思わず見入ってしまう。

黒瀬は俳優並に精悍な顔立ちをしていた。それに加えて、見事に引き締まった体軀。まるで一流ファッションモデルのように華がある。背も高く、立ち姿からは男の色気も

漂っていた。

野性的に見えるショートウルフカットの髪型に、くつきりとした二重の双眸。真っすぐな鼻梁、そして形のいい薄い唇。どの部分を見ても目を惹かれる。

そんな黒瀬は、黒いカーゴパンツに、軀の線に露にする白いTシャツというラフな服装をしていた。恰好よく見せているわけではないのに、年上であるはずの秘書室の高市よりもはるかに男っぽく魅力的だ。

こんな男性は初めてだ。

黒瀬を目にするだけで、藍子の心がざわつき脈が飛び跳ねる。

「茅野さん……って言った？」

「は、はい」

吃る藍子に黒瀬が頷き、静かに片手を差し出す。一瞬握手を求められたのかとどきまぎしたが、そうではなかった。

黒瀬が示したのは、藍子の持つ封筒。預かってきたそれを早く渡せという意味だ。

とんでもない勘違いに顔が熱くなるが、何とか平静を装い、秘書として振る舞うべく考えをめぐらせる。

玄関先でこれを手渡したら、絶対にすぐにドアを閉められてしまう。そうなれば、もう二度と開けてもらえないだろう。

黒瀬と接してまだ数分しか経っていないが、藍子は見抜いていた。彼には頑なな部分があると。接し方に気を付けながら、冷たい目を向ける彼を見上げる。

「秘書室一課の茅野藍子です。本日から月末まで、黒瀬さんの秘書として働くために来ました」

「秘書」は必要ない。会社には何度もそう伝えてあるから、それを俺に渡して、とつとと会社に戻してくれる？」

そう言うと彼は、苛立ちを目に宿して、藍子に覆いかぶさるように威嚇してきた。でも、こうなるのは想定済み。藍子が怯まずにいると、黒瀬の眼光が鋭くなる。

「俺の言ってる意味、わかる？ いつ爪を立てようかと考えてるみたいだけど、俺の腕を引つ掻こうとしても無理だよ、子猫ちゃん」

子猫ちゃん!?

あまりに突拍子もない台詞に目をぱちくりさせる藍子に、黒瀬が手を伸ばしてきた。子猫をあやす手つきで、藍子の顎をそつと撫で上げる。

十年ぶりに男性に触れられて、藍子の心臓が高鳴った。つい、軀がぶるっと震えてしまう。

藍子は顎の下に触れる黒瀬の指に促されて、彼を見上げた。空気を求めてかすかに唇を開けると、彼の目がついと口元に落ちる。

途端軀の中心を疼かせる熱が膨張して、藍子の吐息が甘くなった。

その反応が伝わったのか、黒瀬の面持ちが少し好色に緩む。しかし、藍子を見る目には、侮蔑に似た色がある。

黒瀬の浮かべる相反する表情に、藍子は混乱しそうになるが、そこであることに気付いた。

おそらく、これまでの黒瀬は、こうやっていとも簡単に女性を虜にしてきたのだろう。自分がモテるとわかっていて、相手を唆す行動をあえて取っている。しかしそうでありながら、簡単に誘惑に落ちる女性に嫌悪を抱いているのだ。

黒瀬がそういう行動に出るのには、理由がある。

多分黒瀬は、誘惑に負けた藍子では仕事にならないと言いついて追いつ返そうとして

るに違いない。

しかし、思い通りにはさせない。

藍子は、ゆっくり口角を上げた。

黒瀬の双眸に光が宿り、藍子の目を射貫く。

「言っただと思うけど。俺の裏をかこうとしても、それは無駄な足掻きになる。それがわからないから子猫ちゃんだと言ってるんだ。さあ、さっさとその封筒を渡して会社に戻ってくれないか」

黒瀬の声が、一層低くなる。

藍子はここが肝心だと気持ちを引き締めて、ドアに手を置いた。黒瀬の視線がそこに落ちたのを確認して、今だと目を細める。

「初めてです。こんなわたしを可愛い子猫にたとえてくれる人がいるなんて……」
「はあ？」

黒瀬が片眉を上げて、明らかに不機嫌な態度になった。藍子は意図的に、頬を緩める。
「わたしより四歳も年下の黒瀬くんに、子猫扱いされるとはね」

「えっ？俺より四歳上？……君が!？」

黒瀬が驚愕したのを逃さずに、藍子はドアを押し開いた。

ドアを支える黒瀬が正気に戻る前に、彼の腕の下を潜り抜ける。

「あっ、おい！」

黒瀬が藍子に腕を伸ばし、押し止めようとした。彼との距離の近さが恐い。それを必死に隠して彼を見上げた時、ドアの閉まる音が響いた。

外の音が遮断されて、静寂に包み込まれる。

男性と二人きり。しかも黒瀬の腕は、藍子に触れそうなほどの距離にある。緊張がどんどん高まっていくが、ここで弱みを見せては仕事に差し支える。

最初が肝心だとばかりに、藍子は、挑みかかるようにして黒瀬の目を見つめた。

「技術者育成プロジェクトの作業で、忙しいと伺っています。わたしは秘書なので、こちら方面の専門的な知識はありません。ですが、黒瀬くんの手を煩わせる雑用などを引き受けます。秘書であるわたしに何でも指示してください。……年上のわたしには仕事を頼みたくないかもしれませんが」

最後の一言で、黒瀬は開きかけた口を悔しそうに閉じた。

藍子を早々に追い返すつもりだったのに、今ではどう対処すればいいのか、答えが出ないようだ。

黒瀬はきつと、頭をフル回転させているだろう。

黒瀬の反応が鈍っている今を逃す手はない。チャンスだ！

仕事を続けるには先手が必要だと、藍子はすかさずヒールを脱いだ。そして、廊下の奥に見える磨りガラスのドアへ向かおうとする。しかし、足を一歩踏み出したところで黒瀬に腕を掴まれ、壁に押さえ付けられた。

黒瀬が藍子の両脚の間に片脚を入れてくる。下肢が触れ、彼の体温が衣服を通して伝わってくる。心臓が口から飛び出すのではないかと思うほど、ドキドキし始めた。

黒瀬に惹かれているわけではないのに、呼吸のリズムが崩れていく。彼の言動すべてに、心を揺さぶられる。

その事実混乱している藍子に、彼が上体を屈めて覆いかぶさってきた。

黒瀬の吐息が頬をかすめるだけで、下腹部の深奥がざわざわする。二度と感じたくないと思っていた不快なうねりに、藍子の軀が震える。

「……君の名前、何て言った？」

唐突に訊ねられて喉の奥が引き攣ったが、藍子は平静を装って黒瀬を見上げた。

「茅野藍子、三十二歳です。入社以来、秘書室に籍を置いています」

「ふん。藍子って本当に三十二歳？ もっと若いんじゃないの？」

黒瀬が藍子をかからかうように、いきなり名前を呼び捨てにした。

不意に自分の名を口にされ、衝撃が軀の芯を駆け抜ける。思わず奥歯をぎゅつと噛み締めた。我が身の変化に戸惑うが、自分を律して彼に焦点を合わせる。

「信じていただけないのなら、免許証をお見せしましょうか？」

「いや、その必要はない」

藍子の言葉を黒瀬は一蹴し、今度は真面目な顔つきで藍子を威嚇してきた。

「もう一度言うよ。俺に秘書は必要ない」

黒瀬の有無を言わせない主張に、藍子の手の先が冷たくなっていく。エアコンが効いていて涼しいものもあるが、それとは別の緊張のせいだ。

「黒瀬くんの気持ち、よくわかりました。でも、ここでわたしを追い返しても、第二、第三の秘書が現れます。仕事に集中したいと思うのなら、わたしで手を打つのが一番賢

明かと思えます。あの……一度だけわたしにチャンスをいただけませんか？ この週末までの三日間、わたしを試してください」

藍子はもう賭けに出るしかなかった。

秘書は必要ないと告げる黒瀬の気持ちを尊重したい思いもあるが、そうすると上司の気分を害するだろう。このままでは、どっちつかずで終わってしまう。それは、藍子が望む結果ではない。

先ほどまで、少しでも自分が優位に立とうと黒瀬を煽っていたが、もうそれは止めよう。秘書として来た以上、仕事で認めてもらえるよう努力すべきだ。

その先には必ず突破口があると信じ、藍子は黒瀬に対峙する。

「わたしの存在が黒瀬さんの邪魔になるなら、素直に上司に報告します。お一人でも充分に対処できる方だと。これでも女性秘書の中では一番の年長者です。わたしの言葉なら、総務部長も信じてくれると思います」

「まどろっこしいことなどせず、今すぐ社に戻って言えばいいんじゃないか？ お互い、嫌な思いしなくていいと思うけど」

黒瀬の挑発的な言いに分には怯みそうになるが、藍子は毅然とした態度を崩さず、顎を上げた。

「わたしにも秘書として誇りがあります。職種は違えど、仕事に向き合う姿勢は黒瀬さ

んと同じです。……どうか、その気持ちはわかってくれませんか？」

すると、黒瀬が藍子から軀からだを離した。彼の温もりが消えて、少し心細くなる。
……うん？

突如湧いた気持ちに小首を傾けてしまいたいそうになった時、黒瀬が口を開いた。

「そんなに仕事をしたいなら、たっぷりさせてあげよう。但し、俺の気に障る真似まねをし
たらすぐにでも追い出す。秘書失格という烙印ろういんを押してね。藍子はその覚悟で言ってい
るんだろ？」

「当然です！」

「それなら、俺が君を秘書として認めたら、俺を黒瀬くんと呼ぶのを許してやるよ」

「……えっ？」

黒瀬はおかしそうにふっと口元を緩めたが、すぐに表情を引き締め、顎あごで奥を指した。

「藍子、こっちに来て」

親しげに名前を呼ばれて、藍子の頬が上気する。

「藍子」と呼ばないでと言いたいが、黒瀬はアメリカで働いていたのだ。仕事仲間をフ
アーストネームで呼ぶのが彼にとっては普通なのかもしれない。

藍子は気持ちを切り替えて、黒瀬のあとに続いた。彼は廊下の突き当たりにあるドア
を開け、藍子を促す。

「失礼します」

黒瀬の前を通って、室内に足を踏み入れる。

楽しく料理ができそうなアイランドキッチン、八人掛けの大きなダイニングテーブル、
そしてリビングルームに置かれた大型液晶テレビと、柔らかそうなソファが視界に飛び
込んできた。

一人暮らしには勿体ないほど広々している。ただ、どこか生活感がない。たとえるな
ら、住宅展示場のショールームみたいだ。

藍子がかつそり室内を観察していると、黒瀬が隣に立った。

「ここ以外に、あと二部屋ある。一室はベッドルーム、もう一室はPCルームとして
使ってる。他に部屋はないから、藍子はダイニングルームを仕事場として使ってくれ。
但し、さっきの二部屋は立ち入りは禁止。そこに踏み入った時点で、即刻帰ってもらう。
仕事の出来不出来、善し悪しは関係なくだ。いいね？」

黒瀬の有無を言わせない口調に、素直に頷く。すると彼は仕事の指示もせず、藍子を
その場に置いて、ダイニングルームを出ていった。

藍子は、この状況に戸惑いを隠せなくなる。

もしかして黒瀬は、藍子に仕事を一切与えず、週末までこの状態で過ごせと暗に示し
ているのだろうか。

黒瀬を追いかけようかと思うが、彼の部屋には入るなと言われていた。ここで彼を追えば、そのまま家から追い出されるかもしれない。

それだけは絶対に避けなければ……

藍子はダイニングテーブルの椅子にバッグを置き、軽く部屋を見て回った。何か手を加えるところはないかと探すが、ハウスキーパーがいるのかきちんと整理されている。埃も積もっていなかった。

次にキッチンに行き、大きな冷蔵庫を開ける。

「えっ？ 飲み物だけ？」

そこには、ビールとミネラルウォーターしかない。冷凍庫も、市販のロックアイスが数袋入っているのみ。

今回の仕事は特殊だ。藍子は秘書として与えられた仕事だけをすればいいわけではない。担当する上司が仕事に集中できるよう、雑務を担うのも務めだ。そこには、食事面の管理も含まれている。数時間前、阿川が藍子が料理教室に通っているという話をあえてしたのも、そういう意図のもとだろう。

食材を買い込む必要があることを頭に入れて、さらに調理器具などを確認する。

もう少ししたら買い物へ行こうと心に決めつつ、まずはダイニングテーブルにノートパソコンを置いた。

黒瀬がこれからどう動くのかが気になるが、今の藍子にできるのは、小林室長に連絡を入れ、受け持っているスケジュール管理をすることだ。

十数分後。担当していた分のスケジュール調整を終えて会社に情報を送信した時、ドアが乱暴に開かれた。

腕にたくさんのファイルを抱えた黒瀬を見て、藍子はすかさず立ち上がる。そんな藍子には視線すら向けず、彼はそれらをテーブルに無造作に置いた。

「これ、整理して。あと、会社に提出する書類の作成、電話の対応もよろしく。これらを三日後までに仕上げてください」

藍子はテーブルの上に広がるファイルの量に、生唾なまつばをぐくりと呑む。

どういう書類なのかわからない上に、ぱっと見でも三日で終わる仕事とは到底思えない。

それを理解しているのに、ここでの答えはイエス以外ない。

「……わかりました」

「仕事時間は九時から十七時まで。残業は許さない。あと、これを預けておく」

黒瀬が、家の鍵と指示書をファイルの横に置いた。代わりに、藍子が持ってきた封筒を掴む。

「いちいち俺に断らなくても、勝手に家に入ってきていいから。あと、休憩は勝手に

取ってくれ」

黒瀬はこれ以上話す気はないと告げるように、藍子に背を向けた。彼が部屋を出ていく前にと、慌てて「黒瀬さん！」と呼びかける。

立ち止まって振り返る黒瀬の眼差しは、凍り付きそうなほど冷たい。

「何？」

「黒瀬さんと連絡が取りたい時はどうすればいいですか？」

黒瀬はアイランドキッチンを指す。そこにはコードレス型の子機が置いてあった。

「子機ボタン三番でP Cルームに繋がる。但し、俺は仕事中に邪魔されるのは好きじゃない」

続いて、リビングルームに置いてある複合機を目で示す。

「向こうにはファックスとコピーもある。好きに使っていいから、俺の手を煩わさないでほしい。いいね？」

「わかりました」

黒瀬はこれで話は終わりだとばかりに、ダイニングルームを出ていった。

残された藍子は、椅子に座り、黒瀬が置いていったファイルを開く。

まず目に入ったのは、山盛りの領収書。日付など考えずに、乱雑に束ねられていた。整理するのに時間こそかかりそうだが、これは慣れた作業なので問題なくこなせる。

難題なのは、会議や商談などに必要な文書の作成だ。そこにあるものをただ清書すればいいわけではない。添付されている情報を取捨選択してまとめる必要がある。

しかも、与えられた仕事とは別に、黒瀬の身の回りの環境も整えなければならない。

これはとても過酷な三日間になる……

エアコンが効いて涼しい室内で、藍子のこめかみに嫌な汗が流れた。

だが、この仕事をすると決めたのは藍子だ。ここで躊躇している暇などない。

藍子は指の腹で汗を拭くと立ち上がり、鍵と財布を掴んで部屋を飛び出した。

外へ出るなり、燦々と照りつける陽射しに目が眩む。

肌にとわりつく熱気に汗が噴き出して不快な気持ちになりつつ、マンションから数百メートル行った先にあるスーパ―へ急ぎ足で向かった。

三日分の食材や調味料などを購入した藍子は、重たい袋を提げて来た道を戻り始める。だが、徐々に真夏のこの暑さに息が上がってしまう。立ち止まって休みたいが、時間は待ってくれない。

藍子は玄関のドアを開けた。

頭の中でやるべきことを整理しつつヒールを脱いでいると、先ほどと変わらない服装にアポロキャップをかぶった黒瀬が奥の廊下から現れた。

長財布を後ろポケットに入れながら顔を上げた黒瀬は、藍子を見るなりぎよっとし、

苦々しげに口元を歪めた。

「ファイルを見て、逃げ帰ったと思っていたよ」

藍子は疲れを振り払い、黒瀬の方へ歩き出す。

「お出掛けですか？」

「ああ、昼飯に行つてくる。藍子も好きな時間に食べて。キッチンも好きに使つていいし」

黒瀬が藍子の横を通り過ぎる。藍子は一瞬、手を伸ばして彼の腕を掴もうとしてしまい、自分の行動に驚いた。

仕事とはいえ、自ら男性に触れようとするなんて……

藍子は自分の行動を打ち消すように軀の脇で握り拳を作り、奥歯を強く噛み締めた。

「……黒瀬さん、何のためにわたしがいるとお思いですか？」

黒瀬の足がぴたりと止まり、ゆっくり振り返る。

「どういう意味？」

「買ってきましたよ」

藍子にはにっこりして、手に持つ袋を見せた。

「お仕事に集中できるよう、黒瀬さんのお食事はわたしが用意させていただきます。すぐに準備しますね。どうぞ安心して仕事に専念してください」

「へえ、俺のためにそこまでしてくれるんだ。じゃあさ——」

黒瀬が藍子に近寄る。思わず後ろに下がった藍子を、彼は壁に手を突いて囲い込んだ。さらに上体を屈めて、これ見よがしに顔を近づけてくる。

「俺の性欲が高まって仕事ができないって言ったら、その相手もしてくれるってこと？」

黒瀬の台詞で、脳裏に彼に組み敷かれる自分の姿が自然と浮かんだ。

藍子の服を脱がし、素肌を撫で上げて唇を落とす黒瀬。藍子はされるがまま受け入れ、彼の愛戯にベッドで身悶えてしまうだろう。

でも結ばれた直後、黒瀬は失望し、藍子を奈落へ落とす。それが容易に予想できた。元カレが、藍子って、本当に男心をそそる色気がないよな。男をその気にさせる術を知らない女とのセックスって、満たされるどころか疲れるだけだ」と嘲ったみたいに。

わかりきった結末が次々と浮かんで、藍子の顔から血の気が引いていった。

「……藍子？」

黒瀬の問いかけに、藍子は恐怖に満ちた目で彼を見上げる。

あれは過去の出来事であって、今起きたのではない。二度とそういうショックを受けないために、伊達眼鏡をかけて心を守っている。

大丈夫、冷静に対処すれば、この状況から脱することができる。

そもそも藍子は、男性の目を惹くような色気を感じさせるタイプではない。彼に興味

のある素振りもしていない。

つまり、黒瀬がこんな性的な挑発をしてくるのは、藍子に関心を持っているからではなく、ただの嫌がらせ。秘書が逃げ帰るようにしているだけだ。

藍子は黒瀬の挑発から目を背けて、大きく深呼吸をした。心臓はまだ痛いほどの強さで打っていたが、何でもない振りをして彼を仰ぐ。

男性の軽口に過敏に反応したら負けだ。

藍子は秘書としてだけでなく、年上らしく振る舞うことを心掛けて表情を和らげた。

「その役割は、黒瀬さんの恋人にお任せしたいと思います」

「恋人？ 俺に思うと思う？ 日本に戻ってきて、まだ一ヶ月も経っていないんだ。しかも、俺の時間は仕事に費やされている。その俺に女ができるはずない。……藍子は？ 男がいるのか？」

仕事申中というのに思わず藍子の軀に熱が籠もり始める。けれどもそれを感じさせないように、なるべく変わらない姿勢を心掛けた。

「わたしは仕事に生きているので……」

「仕事に、生きてる？」

黒瀬が怪訝な顔をした。詰め寄られる気配を感じて動転しそうになるが、何とか感情を押し殺す。

「黒瀬さんも仕事に集中していれば……他の欲はどこかへ吹き飛ばんじやないですか？」
それとも、仕事に専念したいと言っているのは嘘だと？ —— そんな目で黒瀬を見つめて、話はこれで終わりだと小さく会釈する。

藍子は黒瀬に背を向けて、リビングルームに続くドアへ進んだ。取っ手を掴んだ瞬間、強い力で手首を握られた。前触れもなく触れられて、激しく動揺する。

「俺が仕事に集中していないって？ 挑発しているの？ ……わかったよ。答えが出るのは三日後だ。俺の性欲についても確認してもらおう」

黒瀬はそう言い捨てると、藍子から手を離れた。苛立たしげにアポロキャップを脱ぎ、奥の部屋に姿を消す。

ひとまず山を越せたと胸を撫で下ろし、藍子はリビングに入った。

購入してきた食材を整理し、続いてサンドウィッチ作りに取りかかる。手軽に食べられたらという気持ちもあるが、主たる目的は別にあった。これで黒瀬の好みや体調を知ろうと考えたのだ。

オムレツのようにふんわりさせた玉子焼き、がつつり目のトンカツ、そしてポテトサラダを作り、パンに挟む。それぞれ味つけにも工夫をしているので、食べ終えた量から、黒瀬の好みだけでなく夏バテをしているのかどうかもわかるだろう。

しばらくキッチンで動き回っていると、先ほどセットしたコーヒのいい香りが漂っ

てきた。すべての準備が整ったのを確認して、藍子は子機で黒瀬を呼び出す。

「昼食ができました。こちらで食べますか？ そちらにお持ちしましょうか？」

『俺が取りに行く』

そう言ったあと内線が切れる。藍子がコーヒーカップをトレイに置いたところで、黒瀬が現れた。

「仕事しながら食べられる方がいいと思います、サンドウィッチにしました。コーヒーメーカーが食器棚にあったので使わせてもらいましたが飲めますか？ 他の飲み物も用意できますが」

「コーヒーでいい。あと、砂糖とミルクはいらない」

藍子は頷くとトレイから不要なものを除き、代わりにウエットティッシュを横に置いた。

「コーヒーはたっぷり作りましたので、呼んでくれればおかわりを持っていけます」

「……わかった」

黒瀬はトレイを持つと、さっさと出ていった。

「さてと！」

藍子もダイニングテーブルに移動して、黒瀬に作ったのと同じサンドウィッチを急いで食べた。

食事を終えたら、いよいよ仕事だ。まず、領収書の仕分けを始める。続いて整理されていない書類を分類していくが、それが困難だった。わざとぐちゃぐちゃにして、藍子に時間をかけさせているとしか思えない。だが、文句を言っても仕方がない。

藍子が集中して作業を進めている間に、黒瀬は二度ほどダイニングルームに入ってきた。そして自らコーヒーを注ぐ。

カップを手にした黒瀬は、藍子の背後にしばらく立ち止まった。まるで、藍子を監視するかのような態度を取られて気が気でなくなる。彼に見つめられるだけで効率が悪くなり、持っている書類が小刻みに震えた。

黒瀬もそれに気付いているはずなのに、藍子に声をかけることはなく静かに仕事部屋に戻っていく。

黒瀬の無言の振る舞いに、藍子の神経はかなりすり減っていた。でもここで逃げれば、何をしに来たのかわからなくなる。藍子は自分を奮い立たせて、仕事に集中した。

そして、十六時を回った頃。

調子がいいと言いが難いが、藍子は仕事の手を止めた。テーブルに広げた書類をひとまとめにして、急いでキッチンに立つ。

シンクには、黒瀬の使った食器があった。

藍子特製の味つけとして、玉子サンドにはサルサソースを、ポテトサラダにはらっ

きよう酢を隠し味として入れていた。そこそこ量もあつたはずだが、彼は完食している。黒瀬の体調は良好、夏バテもなし、そして好き嫌いもあまりなさそうだ。

「これなら、何でも食べてくれるかも……」

藍子は鶏モモ肉を使って、黒瀬の夕食を作り始めた。キッチンに食欲をそそる甘辛い香りが充満していく。付け合わせの野菜なども準備し、冷蔵庫に入れる。仕上げに、メモ用紙に夕食の説明を書き添えた。

時計を確認すると、もう十七時目前に迫っていた。

時間までに退出しなければ、黒瀬に秘書失格の烙印を押されてしまう。

挨拶して出ようかと思つたが、黒瀬はそれを望んでいないだろう。邪魔するなど告げて鍵を渡しているのが、その証拠だ。

藍子は最後に部屋全体を確認して、マンションを出た。帰宅途中にカフェへ寄り、主に仕事の報告メールを出す。そこでやっと、ひと息吐くことができた。

一日目は、渡されたファイルを確認して仕分けするだけで終わってしまった。残りはあと二日しかない。

明日は朝一番で会社に寄つて必要な資料をコピーし、黒瀬のマンションへ向かおう。

「疲れた……つて言つたらダメだけど、今日は本当に辛かった」

藍子は伊達眼鏡を外すと目頭を手で揉んだ。それから、脱力してテーブルに突っ伏す。

周囲の目があるが、構つてなどいられない。頭の中は、すっかり黒瀬のことで占められていた。

藍子は、これまでも気難しい上司と仕事した経験が多々ある。そこには無理難題も多かったが、可能な限り努力し、誠実に対応してきた。そのため、彼らとはそれ相應の信頼関係を築けるまでになつていった。

黒瀬は、藍子の対応を素直に受け入れてくれない。それだけでなく、彼は仕事以外の話や意味深な言動で、藍子のリズムを崩そうとしてくる。

仕事以外の話に逸れた時は、本当にどうにかなりそうだった。

現在恋人はいないようだが、黒瀬の男らしい相貌から判断すると、付き合う女性はモデルタイプの綺麗な人はかりだと考えられる。本来なら藍子など歯牙にも掛けないだろうに、藍子に恋人の有無を訊ねるなど、一体どういう了見なのか。

いや、あの行為には深い意味はないのだから、引っ掛かつてはいけない。黒瀬は藍子に嫌がらせをして、追いつ出そうとしているだけ……

藍子は深いため息を吐いたのち、自宅に帰った。

それからの二日間、藍子は仕事に忙殺された。

二日目は、一日目と同じタイムスケジュールを基本にしつつ、文書作成に勤しんだ。

彼の体調を考慮した食事を用意するのも怠らない。

そして三日目にして、やっと調子が上がってきた。でも、波に乗ってきたと思ったら、もう最終日。あと数時間しか残っていない。

藍子は会社でコピーしてきた資料と黒瀬に渡された文書を見比べつつ、書類作成に励む。

結果、この三日で、彼が様々な案件にかかわっているとということがわかった。

渡されたその文書の項目は多岐にわたっており、どの書類にも、最終確認者として黒瀬の名があった。

それらをまとめることは藍子にとってかなりのプレッシャーだが、これまでの知識と直感を信じて、打ち込むスピードを上げていく。

「あと、もうちょっとだけ……」

そろそろ昼食の用意を始める頃合いだが、藍子は手を止めずキーボードに指を走らせた。

ページを捲ろうと指を離れた拍子に、黒瀬の家の電話が鳴り響いた。ノートパソコンの横に置いていた子機を掴む。

「黒瀬です」

『あっ、茅野さんですよ？ 連日すみません。昨日もお電話した小田原です。あの黒

瀬……さんはいますか？』

「はい、少々お待ちください」

保留にして黒瀬に連絡しようとした時、リビングルームのドアが開いて彼が現れた。

「黒瀬さん、小田原さんからお電話です」

「ああ」

仕事部屋に戻るかと思いきや、黒瀬は藍子に手を差し出した。藍子は子機を渡して、代わりに彼が持つ空のマグカップを受け取る。

「董？ ……昨日の今日で連絡って、そんなに俺が信じられない？」

初めて耳にする、黒瀬の穏やかな口調。しかも彼は嬉しそうに笑い声を上げた。瞬間、藍子の胸の奥にぎゅっと締め付けられるような痛みが走る。

何、これ……

忘れていた何かを藍子を雁字搦めにする。

藍子は不可解な感覚から逃れるために黒瀬に背を向け、マグカップを洗ってコーヒーを淹れた。

振り返ると、黒瀬はダイニングテーブルの椅子に座って電話をしていた。

「何時に行けばいい？ ……わかった。行くよ」

藍子は黒瀬に近づき、彼の前にマグカップを置く。彼が頷くのを確認して、キッチン

へ向かった。

黒瀬がそこに座って電話をしていたら、仕事に集中できない。ここで切り上げて、食の準備をするのが一番いい判断だ。

藍子は冷蔵庫の扉を開けて、昼食に必要な材料を取り出した。がつつり系でも難なく食べる黒瀬のために、牛肉の梅肉和えスタミナ丼を作る。

しばらくして黒瀬は電話を切ったが、席を立つ気配はない。彼はキッチンにいる藍子を見ながら、コーヒーを飲んでた。

黒瀬に食い入るような目を向けられて、藍子の手元が狂いそうになる。手順もあやうく間違えそうになったが、なるべく彼を見ずに集中することを心がけた。

キッチンに充滿する、醤油と砂糖の甘辛い香り。さらにそこに梅干しがまざり、食欲をそそる匂いが広がった。

炊きたてのご飯の上に梅肉和えを盛り、かいわれ大根とポーチドエッグをトッピングする。横にオニオンサラダも置く。

藍子がトレイを持つとした時、黒瀬がアイランドキッチンに来た。

「美味しそうだね。食欲をそそる、とてもいい匂いだ。いつもありがとう」
黒瀬の言葉に、藍子は戸惑う。彼が礼を言うとは思っていなかったたので、口籠もってしまった。

藍子が呆然としてみると、彼はトレイを手にとり、かすかに口角を上げてダイニングルームを出ていった。

黒瀬の不可解な態度に、藍子はしばらく立ち尽くしていたが、ひとまずぐちゃぐちな思考回路を脇へ退けようと頭を振った。

今は黒瀬のことを考えるべきではない。やるべきなのは、目の前にある仕事だ。藍子は小さな器に盛った自分の分をテーブルに置くと、急いで食べ始めた。

その後は、再び集中力を高めて仕事に取り組む。黒瀬の望むレベルの書類が完璧にできているとは思えないが、それでも、藍子なりの精一杯で仕事を進める。彼が気にしている箇所の注釈は別に参照資料を作り、システム

技術支援への要望なども、合わせて清書する。資料作成はここで終了、として時計を確認すると、もうすぐ十六時になるうとしていた。

残り一時間でできるか不安だが、最後に残していた経費精算の作業を始める。領収書を確認しては入力し、項目欄にチェックを入れていく。

「あと少し……！」
ひたすらキーボードを叩いた結果、十七時五分前にすべての仕事が終わった。本当にギリギリだった。ひとまず、首の皮一枚繋がったと言えるだろう。あとはなる

立ち読みサンプル はここまで